H25.8.31

先発薬が高価なとき

Dr. 和の町医者日記

「お薬」シリーズ④

どうする抗がん剤や医療用麻薬

ジェネリック医薬品の最大の特徴は先発品より安価なこと。お金のことを考えると、先発品が高価であればあるほど、ジェネリックの需要が高まります。

たとえば抗がん剤は、驚くほど高価です。患者さんが経口抗がん剤を手にする薬局の窓口で言われる金額は、ひとケタ計算間違いではないかと思うほどです。それほど、がんとの闘いで使う薬には高い薬価がついています。

たとえばTS―1という有名な経口抗がん剤があります。胃がんや膵臓（すいぞう）がんなどに使われます。先月、ジェネリック医薬品が出ました。薬価は、先発品の約7割。つまり、患者さんは3割引で薬を手に入れることができます。窓口負担にこだわる人ほど、ジェネリックを選ぶでしょう。

どちらがいいのか。ジェネリックも効果は同じか、と聞かれたら大変困ります。患者さんの経済状況を聞いてから答えが変わるかもしれません。もしお金に困っている人ならジェネリックを勧めるでしょう。「薬剤師さんによく相談してください」と逃げることもあります。

実は、この疑問はとても奥が深いのです。さらにややこしいことにTS―1のジェネリックは健康保険が効くのは胃がんだけで、膵臓がんには保険診療では使えないのです。なぜなのか。厚生労働省がそう定めているからとしか答えられません。

ジェネリックの窓口負担が安いことは純粋にいいことですが、それ以外にこのような制約がつく場合があります。抗がん剤もジェネリックをどう選択するかの時代になっています。

一方、医療用麻薬もジェネリックの時代に入っています。抗がん剤も高価ですが、麻薬も負けずに高価。患者さんの中には、薬代がもったいないので、がんの痛みを我慢しているという人もいるぐらいです。

最近、がん以外に起因する慢性疼痛（とうつう）にも麻薬が使えるようになりました。3日に1回貼るタイプの麻薬は、がんの痛みはもちろん、がん以外にも使えます。ジェネリックは発売されたばかりですが、薬価は先発品の7割。患者さんの自己負担も3割安くなります。今後、これを選ぶ患者さんが増えるかもしれません。

ジェネリックのおかげで緩和ケアが普及するかもしれません。高いからいやという人には、ジェネリックという手もある時代。不思議なことに抗がん剤も麻薬もジェネリックは3割引。ジェネリックは3割以上の値引きが決まりです。しかし、5割引だと効果に不安を持たれるかもしれない。7割引だとどんな人でも不信に思うでしょう。

そういった事情を勘案しての「3割引」なのでしょうか。もしジェネリックが先発品と同じ値段だったら、ジェネリックを選ぶ人は、ほとんどいないでしょう。そう考えると、ジェネリックの値段はとても重要。しかし本来は「安かろう、良かろう」を目指すのがジェネリックです。

先週、「医療否定本に殺されないための48の真実」（扶桑社）という本が出ました。がん検診を受けるか受けないか、また発見されて、がんを放置すべきかどうかで悩んでおられる方はぜひ読んでください。過度な医療否定で、損をするのは患者さんです。賢い患者さんを目指してください。

慢性疼痛　3カ月以上持続するがん以外の病気に起因する痛みの総称。原因としては腰部脊柱管狭窄症、骨粗しょう症、繊維筋痛症などがある。この病態に麻薬を使う医師には一定の講習が義務づけられている。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。55歳。

ひょうご